

■論文の目次構成

【序論】

第0章 本研究について

- 0-1. 研究の動機・背景
- 0-2. 研究の目的
- 0-3. 研究の方法
- 0-4. 本研究の位置づけと既往研究
 - 0-4-1. 地質
 - 0-4-2. 集落地理
 - 0-4-3. 集落構造の変容を追う研究
 - 0-4-4. 地域史・雲仙岳の記録
- 0-5. 本研究の基礎情報
 - 0-5-1. 「集落」の範囲
 - 0-5-2. 「名」とは
 - 0-5-3. 「災害」とは

【本論】 13

第1章 日本の火山のなかの雲仙岳

- 1-0. はじめに
- 1-1. 火山のもたらす恩恵
 - 1-1-1. 本論文における定義
 - 1-1-2. その定義と類似するものの既往の分類
 - 1-1-3. 定まった「恩恵」とそれらの関係性
- 1-2. 調査対象地域の選定
 - 1-2-1. 日本の活火山・火山災害
 - 1-2-2. 対象地決定とその根拠
 - 1-2-3. 類似する火山地域
- 1-3. 小結

第2章 調査対象集落の決定

- 2-0. はじめに
- 2-1. 雲仙岳・島原半島の概略
 - 2-1-1. 火山活動史
 - 2-1-2. 歴史地誌
- 2-2. 調査対象集落の決定
 - 2-2-1. 集落の選定方法
 - 2-2-2. 集落の分析方法
- 2-3. 小結

第3章 集落の分析① 調査結果の集積・分類

- 3-1-1. (a) 雲仙市 国見町多比良丁（小字：高下）
- 3-1-2. (b) 雲仙市 国見町多比良丁（金山神社）
- 3-2. (c) 雲仙市 小浜町雲仙（温泉神社）
- 3-3. (d) 雲仙市 吾妻町栗林名（小字：山田原）
- 3-4. (e) 島原市 旧島原町域
- 3-5. (f) 南島原市 口之津町乙（小字：早崎牛牧）

- 3-6. (g) 雲仙市 国見町神代丙
- 3-7. 小結

第4章 集落の分析② 集落構造の比較

- 4-0. はじめに
- 4-1. 形態の成り立ちとそれに関わる恩恵
- 4-2. 利用される恩恵とその立地の変遷
- 4-3. 小結

第5章 考察：火山接近集落の集落構造の特異性

- 5-0. はじめに
- 5-1. 集落形態が発生・消滅する要因
- 5-2. 利用される恩恵が変遷する要因
- 5-3. 小結

【結論】

第6章 結論

- 結論
- あとがき
- 謝辞
- 図版出典
- 参考文献

■序章

0-1. 研究の動機・背景

自然災害が発生する頻度が多い日本であるが、その中でも火山災害は被害の予知や防災が難しいといわれる。近年でも口永良部島や草津白根山や新燃岳のように、何度も噴火を経験している火山周辺での人的被害が出ている。火山から十分距離をとって居住すればよいのになぜ人は火山の側に住むのか。

千年村プロジェクトでは、古代から続く集落の特性を評価・分析し、その優れた生存立地を見出すことを目的としている。プロジェクトは2011年の東日本大震災後に、逆に災害とは無縁の、健全であるがゆえに無名な地域を見つけることから端を発して、大災害による断絶を経験したことがあるような弱い土地は本来メインの対象ではない。とはいえ現在プロットまたは認証されている千年村がそれだけ永い間持続したのは、大小の差こそあれ自然的社会的災害・変化を乗り越えてその土地に利を見出して人が戻ってきたからであり、決して土地所有の断絶を経た地域を省くわけではない。

この認識をうけて、それなら思い切って火山災害という大きな転換点、またはその危険に際しても、集落が持続するための要因と、それらを包括して形成される火山地域特有の集落構造を探ろうと思ったのが第二の動機である。

九州には和名類聚抄から比定される集落が全国的にみて少ない。しかし九州にも千年前から人が住む場所は必ずもっとあるはずなので、九州出身の人間としてその調査対象地の抜けを埋めてみたい。

0-2. 研究の目的

- ① 火山災害の可能性のある土地にもかかわらず持続した集落の存在を示すとともに、それらの集落が持続可能であることの背景に、火山地域の特異性があるかどうか分析する
- ② 和名類聚抄で比定される集落がない九州地方高来郡の、異なる文献に記載がある古代郷を示し、その比定地を調査して情報を蒐集する

0-3. 研究の方法

図1 論文構成を以て説明に代える

0-4. 本研究の位置づけと既往研究

本研究は、地球科学・地域史・民俗学・集落地理学・建築学領域を横断的に含む



図2 研究の位置づけ

また、それらの分野を意識しながら既往研究を精読し、地質/集落地理/集落構造の変容を追う研究/地域史・雲仙岳の記録に分類して参考文献として示した。

0-5. 本研究の基礎情報

前提となる用語(集落・名・災害)の定義を示す。

■本論

第1章 日本の火山のなかの雲仙岳

- 1-1. 火山のもたらす恩恵
- いくつかの先行研究を参照しながら、集落に人が住み続ける理由となりうる資源・および人の生活する空間を物理的・社会的に場

所を限定する要素を恩恵という言葉で定義、12要素

- 1. 鉱山資源 2. 石材資源 3. 温泉 4. その他地熱利用
 - 5. 水利用 6. 隣接する水産狩猟資源 7. 神社寺院 8. その他伝承文化 9. 農作物 10. 加工品A(主に地産地消) 11. 加工品B(貿易品になりうる) 12. 行政上の立地
- を準備し、それら恩恵同士の関係性が影響して形成された集落の形態・社会集団が集落構造であると定義する。

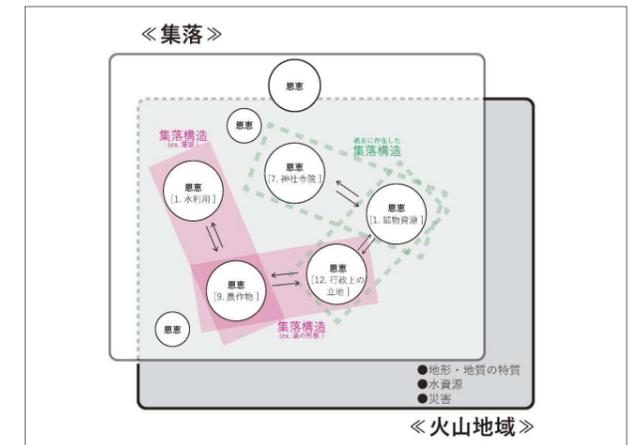


図3 集落の構成

1-2. 調査対象地域の選定

次に日本の火山地域を恩恵の定義を以て分析し、調査対象を雲仙岳接近集落に決定した。

第2章 調査対象集落の決定

2-1. 雲仙岳・島原半島の概略

3章以降で現在の島原半島を詳細に調査するのに先立ち、島全体の通史として成立過程を示す。タイムスケールの違い、人間の社会集団が登場するか否かで火山活動史・歴史地誌の2節に区別する。

2-2. 調査対象集落の決定

その集落の歴史が長ければ長いほど、災害や周辺環境と集落構造との関連がいくつもの段階で見ることができるのではないかと考え雲仙岳周辺の集落についてできるだけ古い記録から順に探し

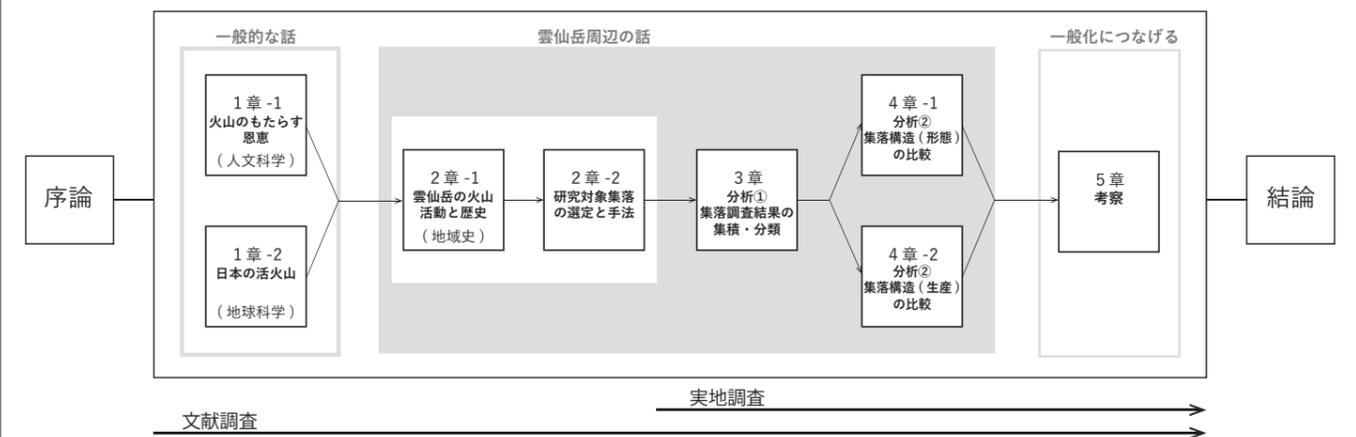


図1 論文構成

た。結果

- a. 雲仙市 国見町多比良丁（小字：高下）
- b. 雲仙市 国見町多比良丁（金山神社）
- c. 雲仙市 小浜町雲仙（温泉神社）
- d. 雲仙市 吾妻町栗林名（小字：山田原）
- e. 島原市 旧島原町城
- f. 南島原市 口之津町乙（早崎牛牧）
- g. 雲仙市 国見町神代丙

の7集落・地域が対象集落に挙がり、それら集落のあらゆる情報を以下の項目を使って分類した。

=====

◀市町村名 大字（比定に繋がった小字名）▶

■基本情報：比定される地名について、その由来・初出年代など

【環境】

■地形・地質：地形の成り立ち、岩石・土壌の特徴、その年代など。

■災害：島原の乱、島原大変、それ以外の特筆すべき災害の規模や特徴について。

【交通】：主な道や鉄道、海路、水運の歴史と現在の様子について。

【地域経営】：集落を営んでいく上での核となる場所について。

【集落構造】

■形態：集落の平面プランや高低差の利用方法について。

■生産：集落内で産出され、生活を支えたり経済を動かしている/いたものについて。

【恩恵】：横軸は時系列、縦軸には「恩恵」12項目と環境（水資源、地形・地質条件、災害・乱）を置き、棒グラフでその発生・転換・衰退を示す。

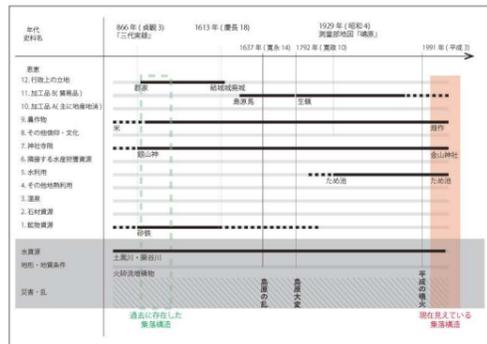


図4 分析の基本となる図記入例

=====

第3章 集落の分析① 調査結果の集積・分類

3-1-1. (a) 雲仙市 国見町多比良丁（小字：高下）

3-1-2. (b) 雲仙市 国見町多比良丁（金山神社）

3-2. (c) 雲仙市 小浜町雲仙（温泉神社）

...

3-7. 小結

各集落ごとの詳細な調査から、

○集落は時代によって何度か利用する恩恵を変えていること

○集落構造を形成する恩恵とその利用は一時代に複数登場する場合がほとんどであること

○相互作用は対一対対応ではなく重層的であること

がわかった。

第4章 集落の分析② 集落構造の比較

4-1. 形態の成り立ちとそれに関わる恩恵

前節をうけて、これらの集落が時代によって何度か利用する恩恵を変えながら持続してきているにも関わらず、かつての生産活動は地名の比定地の形態からは読み取れないということがわかった。その理由として第3章までの調査から、集落の生活を支えたり経済を動かしている恩恵が、必ずしも常に各集落内で産出・利用されていたわけではないことが挙げられる。

本項では集落の持続に関わった生産活動＝恩恵・恩恵同士の関係性が、集落内外のどのような場所で利用されどのような位置的変遷をたどったのかについての情報を抽出し、その傾向を分析する。土地条件図に位置の変遷を番号で降ったのが図5～10。

4-2. 利用される恩恵とその立地の変遷

これまで利用される恩恵と生産は、そのものの移り変わりや連動して立地も動いていることが明らかとなった。生産の変化と被災（島原の乱・島原大変）の有無によって、a～fは3パターンに分類できる。

パターンA：被災なし＋生産の変化(a, d, g)

パターンB：被災＋生産の変化(e, f)

パターンC：被災＋生産の変化なし(c)

第5章 考察：火山接近集落の集落構造の特異性

5-1. 集落形態が発生・消滅する要因

過去に利用されていた恩恵によって成り立つ集落の形態が現在見ることができない理由として、過去にその土地で利用されていた恩恵が利用されなくなり別の恩恵を利用した生産に移行すると、その土地のこれまでの集落構造がベストな形態・土地利用であるとは言えなくなることが関係しているのではないだろうか。

集落で利用される恩恵が転換された後、またそこに集落を存続させるためには、選択された新しく利用できる恩恵に適応した集落形態・生産へ変化する必要があった

5-2. 利用される恩恵が変遷する要因

災害による生産・土地利用の一時的な断絶は、利用する恩恵の変化に直接的には影響しない。

恩恵の変遷要因が、その土地内の出来事のみで完結することはない

ケース① その場所の住民・指導者が、新たに土地の利点を発見・利用する手立てを獲得したことによって、より利益を得られる方に自発的に動いた

古代から現在に至るまで特定の時代・地域に囚われず、絶えず起こりうる変化であり、これによって形成された集落構造は土地特有の地形・地質や資源に準ずるものであるから、無理がなく長続きしやすいと考えられる。「火山の恩恵」と呼べるものである。

ケース② 土地の支配体制が抜本的に変更されたり、土地の性質がかつての生産活動を同じ場所で行えないほどに変化したことによって、その土地の住民にとっては受動的に利用せざるを得なかった

具体的には土地にあわない開墾・強制的な改宗などが挙げられ、

大抵の場合トップダウンで行われるから、再び主導者が変わったり災害に遭うと容易く変化する。また、ある特定の支配体制下に置かれた状態で記録されることが多く時代が限定しやすい。災害に遭うということはこれまでの生産の記録がリセットされることを意味し、①・②どちらの変化のトリガーにもなりうる。

5-3. 考察小結

島原半島のように山麓が海岸ぎりぎりまで迫り平坦な土地に限られていて耕作地が広く取れず、集落を長期的に存続させるといふ点から見れば火山性の土地条件は不利に働くはずである。



図5 多比良丁高下



図6 小浜町雲仙

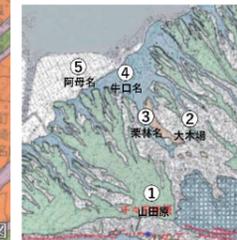


図8 栗林名山田原



図7 島原市島原

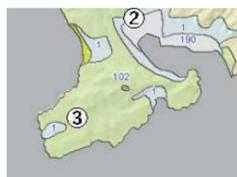


図9 口之津町乙早崎牛牧

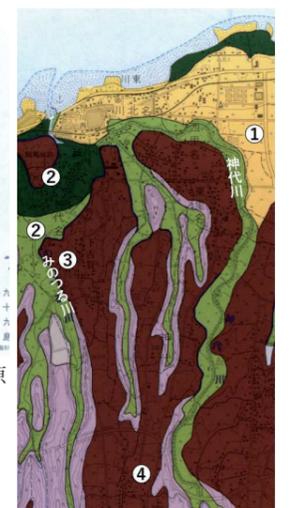


図10 神代町丙

■結論

長崎県雲仙岳に接近する、古代郷・中世荘園が比定されている7集落の集落構造を読み解くことによって、これらの集落は1000年余りの期間にわたり、名という狭い区画単位の中で生産活動とそれに適した土地利用を変化させてきたことがわかった。

それを可能にした根底的な要因として、雲仙岳の火山活動によって形成された土地の特異性があると結論付けた。

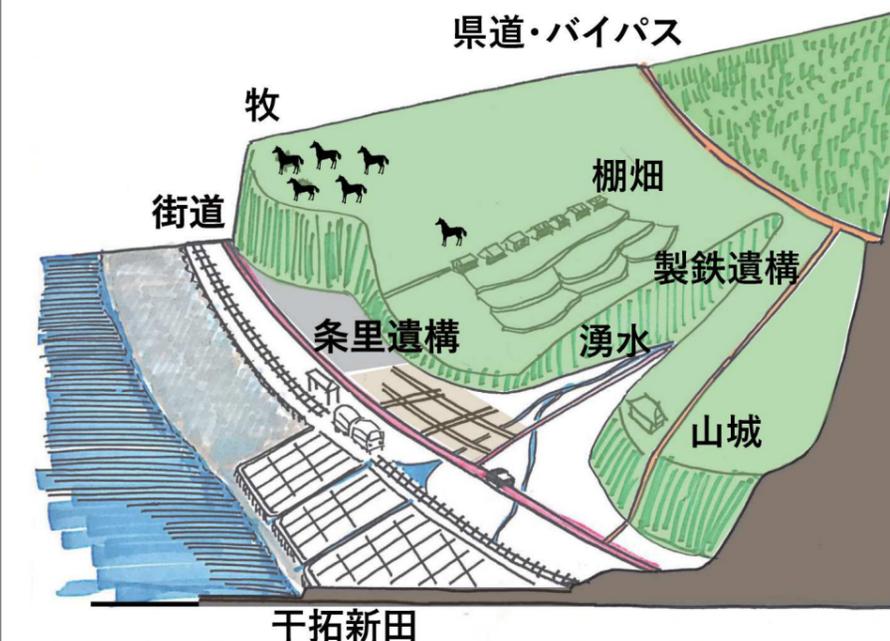


図10 雲仙岳接近集落のモデル図

■図版出典

図1 筆者作成

図2 筆者作成

図3 筆者作成

図4 筆者作成

図5,6,7,9 国土地理院「地理院地図：火山土地条件図」（国土地理院，1997年）を基に筆者加工

図8 嶋本 利彦「日本の地震活動－被害地震から見た地域別の特徴－」

図4-1(地質学雑誌 103巻，総理府地震調査研究推進本部地震調査委員会，1997年)を基に筆者加工

図9 国立研究開発法人産業技術総合研究所「日本シームレス地質図」を基に筆者加工

図10 筆者作成